

# 常滑焼の活用とこれから

Utilizing and Future of Tokoname Pottery.

地域キュレーションコース

瀧田 遥加

Takita Haruka

## ●はじめに

愛知県常滑市で平安時代から作られ、日本六古窯の1 つとして日本遺産にも登録されている「常滑焼」について、その歴史や活用のされ方などの現状についてまとめ、他地域と比較することでこれからどうなっていくのか、保存していくためにはどのようにすれば良いのかを考察する。

## ●第1章 常滑焼概要

常滑焼のうち、陶器の生産用品・製品及び登り窯の1655 点が国指定重要有形民俗文化財に指定されている。常滑焼は、鉄分を多く含む陶土があるということ、窯を作りやすい地形であるということ、水運を生かすことができる土地であることの3 点から、やきもののうち特に甕などの「おおもの」作りで発展していった。

## ●第2章 現在の常滑焼について

とこなめ陶の森研修工房はやきものの教育施設で、「やきもの作りを生業とする人材を育てる」という目的のもと人材教育を行っている。また、常滑東小学校と常滑中学校では陶芸授業が行われており、常滑で育つ子どもたちが常滑焼を身近に感じ、常滑について学び、愛着をもつことができると考える。昭和47 年から平成27 年に行われていた長三賞常滑陶芸展・陶業展は、伊奈長三郎が陶芸界や常滑焼が発展することを願い常滑市に寄贈した基金を用いて始まったが、時代が進むごとに常滑市からの応募点数が減少し、受賞作品も常滑焼を系譜していないものが増え、常滑焼の振興に貢献しているとはいえなくなっていった。

「TOKONAME」と「chanoma」はどちらも現代の人でも常滑焼に親しみを持つことができ、現代の暮らしに合った常滑焼を作っている。常滑で活動をしている作家への取材では、作家目線で常滑が創作活動のしやすい場所だということが分かった。

## ●第3章 焼き物を活かしたまちづくり

常滑やきもの散歩道は、昭和初期ごろ最も栄えた窯業集落一帯で、今も点在する煙突・窯・工場など、時代とともに使われなくなった歴史的産業遺産を巡る観光スポットである。また、常滑焼まつりは、年に1 度常滑市で行われる常滑焼を即売するイベントで、常滑市外からも多くの人が訪れる。

常滑市観光戦略プランに掲載されているアンケート結果からは、若い世代の常滑に対する陶磁器のイメージや興味度の低さなどが分かり、常滑に対する陶磁器のイメージの世代間ギャップが

あることが分かった。

## ●第4章 他地域との比較

常滑と同じ愛知県であり、日本六古窯の1 つである瀬戸焼を対象に比較を比較を行った。常滑焼と瀬戸焼は、土に鉄分が含まれているか否かや、それに付随して発展していったやきものの大きさなどの違いがある。さらに、現在の教育やまちづくりの状況として、瀬戸の方が行政が関わる比率が高いということが分かった。

さらに、それぞれの産地を区別するのではなく、日本六古窯として6 つの産地間で協力するなど、連携することで価値を高め、力を合わせて価値のあるやきものたちを保存していく取り組みが行われている。

## ●第5章 まとめ

常滑焼は時代とともに求められるものや取り巻く状況は変化している。常滑焼のことを知らない人にその価値を伝え、存在を知ってもらうことが常滑焼をこれから保存していくにあたって重要だと考える。その中で、常滑焼の産業や文化を保存するために、現代に合った常滑焼を開発したり、教育を行ったりする人がいる。特に常滑では、地元愛や郷土愛が強い人が多いのではないかと考える。そういった人たちが中心となってこれからも保存の取り組みが行われていくのだと考える。

## ●おわりに

常滑焼の存在や価値をいろいろな人が知ることによって常滑焼は保存されていくと考える。この論文が常滑焼について少しでも多くの人に知ってもらうきっかけになることを願う。

(主要参考文献)

松井武敏, 安藤慶一郎監修「常滑市史 文化財編」/ 常滑市役所発行 / 第一法規出版/ 昭和58 年3 月30 日

古池嘉和「陶磁器産地の文化資本による評価と課題：第二次大戦後の瀬戸 / 常滑を例に」/ 国際文化政策11 号/2021/p57-65

「第6 次常滑市総合計画」/ 常滑市企画部企画課/2022 年4 月

「第32 回長三賞常滑陶芸展」とこなめ陶の森/ 合資会社誠進社/ 平成27 年12 月